

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02575

研究課題名(和文) 現代アメリカ詩におけるエレジーの変化について

研究課題名(英文) Poetry of Lost Loss: a Study of the Modern and Contemporary American Elegiac Poetry

研究代表者

古村 敏明 (Komura, Toshiaki)

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：90632571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題において、以下の成果が収められた。まず、主要成果として、学術著書、*Lost Loss in American Elegiac Poetry: Tracing Inaccessible Grief from Stevens to 9/11* が2020年10月に刊行された。この著書は、現代アメリカ詩におけるエレジーの変化について考察する研究であり、lost loss、「失われた喪失」という新概念を提示して、現代エレジーを読み解く。本著は、アメリカ文学会賞を受賞するなどの評価を得た。主著書のほかは、学術論文3編の掲載、国内・国際学会での発表10件余が、本研究期間中の成果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究では、現代アメリカ詩におけるエレジーの変化について考察する。現代以前のエレジーでは「慰め」が重要な思想基盤であったが、現代詩は「慰め」が否定または複雑化された現状と向き合う。従来の学説はこの事象を現代的懐疑主義などで説明することが多かったが、本研究では「失うことを失った」という無意識的喪失感(lost loss)によるものではないか、と提案する。この研究の目的は、文学的意義としては現代におけるエレジーの変化を解明することであり、社会的要請としてはアメリカにおける9.11、日本における3.11、個人においては親しい人の死など、常に必要とされる追悼のより助けになる形を模索することである。

研究成果の概要(英文)：This research project resulted in the following outcomes. As the main research output, a full-length academic monograph, *Lost Loss in American Elegiac Poetry: Tracing Inaccessible Grief from Stevens to 9/11*, was published in October 2020. This monograph studies one of the defining characteristics of modern and contemporary elegiac poetry: vague feelings of unrecognized loss. The book names this phenomenon “lost loss”: a sense that a specific loss is either itself forgotten, effaced, or made inaccessible, or that it has become a stand-in or screen for something else. This concept necessitates a distinct sub-category of inquiry, for, in lost loss, the cognition of loss itself is questioned or questionable, complicating its effects in ways that deviate from other dominant theorizations of loss. This monograph was awarded the ALSJ Book Prize. In addition, three academic articles were published and about ten conference presentations were given during the course of this grant.

研究分野：現代アメリカ詩

キーワード：現代アメリカ詩 エレジー 喪失の理論化 慰めと共感 精神分析アプローチ

1. 研究開始当初の背景

Poetry of Mourning (1994) の序章で、著者 Jahan Ramazani は、「私たちはエレジーを必要としている」と述べる。二回にわたる世界大戦を経験した「悲劇の世紀」と呼ばれる 20 世紀を経て、21 世紀になった今でも、アメリカにおける 9.11、日本における 3.11、現在も続く中東の混乱、というように、自身または他者の死別や故郷の喪失などの様々なかたちの喪失が存在する。現代アメリカ詩におけるエレジー (elegy) の特徴の一つは、上記のような「認識できる明確な喪失」を扱うものも多く存在するが、「認識するのが困難な、不明瞭な喪失」をも表現しようとしていることである。本研究では、この「喪失の不明瞭化」という現象を、「失われた喪失」(lost loss) と呼称する。その現象は、特定の喪失自体が失われたような、あるいは、あったとしても、他の表現できないものの遮蔽物 (screen) となったような感覚のことを指す。本研究の主旨は、現代エレジーを「失われた喪失」という現象から読み解くことである。

近年の英米詩におけるエレジー研究の動向としては、Peter Sacks が *The English Elegy* (1985) で、現代以前のエレジーにみられる「補償作用的慰め」(compensatory consolation) という枠組みを構築した。その後、前述の Ramazani (1994) が、現代詩にはその枠組みが当てはまらず、慰めを忌避する「アンチ・エレジー」(anti-elegy) が現代エレジーの基盤である、と主張した。Sigmund Freud の “Mourning and Melancholia” (1917) は、哀悼者が快復に向かう哀悼と、快復に向かわずメランコリー (melancholia) に陥る哀悼が存在する、と論じるが、Sacks が古典エレジーを回復型哀悼であるとするなら、Ramazani は現代エレジーをメランコリー型哀悼であるとする。その後のエレジー研究、Judith Butler の *Precarious Life* (2004) や、Max Cavitch の *American Elegy* (2007)、Diana Fuss の *Dying Modern: A Meditation on Elegy* (2013) などは、エレジーの社会的、公的、倫理的側面を扱っているが、これらの研究は、「明確な喪失」によるメランコリー型哀悼を根底においている。

しかし、特に現代アメリカ詩においては「不明瞭化された喪失」を表現するエレジーも存在し、本研究はそれらに焦点を当てる。例としては、Malka Heifetz-Tussman の “Cellars and Attics” のように、ホロコーストを直接体験していないがその記憶を受け継いでいる第二世代生存者が感じる、直接的な喪失を伴わない喪失感、Theodore Roethke の “Elegy for Jane” のように、自身と死者との関係性が希薄なため「喪失」と呼ぶ権利をもたないにも関わらず感じる喪失感、などがある。これらの「不明瞭な喪失」のエレジーは、従来の melancholia で説明できるものではなく、軽度だが持続的な dysthymia (ディスチミア) によって象徴される、と本研究は主張する。

本研究者は、この研究を 2010 年に *English Literary History* から出版された Wallace Stevens のエレジーを扱った “Modern Elegy and the Fiction and Creation of Loss: Wallace Stevens’s ‘The Owl in the Sarcophagus’” という論文を始めに着想に至った。この論文は、Wallace Stevens の詩をもとに、近・現代英文詩における、エレジーの変化を、D. W. Winnicott の対象関係論や Nicholas Abraham と Maria Torok の新フロイト精神分析理論を用いて読解している。その結果、現代エレジーは、これまで考えられていたような「失ったものを言語などの他の形に変えて取り戻す代償行為で癒しを得る」思索だけではなく、「喪失の喪失」(“loss of loss”)—特定の喪失対象が存在しない、あるいは失われている、または、他のものを象徴するのみのものとなりはてている—という現象の解明も行う、と推論する。この仮説を根幹に、2011 年に University of Michigan, Ann Arbor で博士論文を完成させ、その後、この着想を深化させることで本研究の構想が生まれた。

本研究の著書としての構想は、以下のとおりである。序章で、John Milton, William Wordsworth, Gerard Manley Hopkins, W. H. Auden, Malka Heifetz-Tussman, Theodore Roethke などの作品を俯瞰しながら現代エレジーの変化をたどり、「喪失の喪失」(lost loss)、及び、ディスチミア型追悼 (dysthymic mourning) という概念を紹介する。第一章では、Wallace Stevens の後期作品をもとに、「喪失の喪失」という現象を可視化する。第二章では、Sylvia Plath が 1962-1963 に書いた詩群を裏付けとし、「喪失の喪失」という喪失の不明瞭化が、メランコリアよりディスチミアによって象徴されることを確認する。第三章では、Elizabeth Bishop の *Geography III* の詩を中心に、「喪失の喪失」の現象により不明瞭化され、なくなりかけている「喪失」に、形をあたえそれを知覚しようとする試みに焦点をあてる。第四章では、Sharon Olds の *The Dead and the Living* の詩をもとに、時代的もしくは地理的に「遠い」人々の死や苦しみ—つまり、人によっては自分が感じる「喪失」とは認識しない事象—に対する共感の可能性について論考する。第五章では、9.11 以降のエレジーの代表例として Louise Glück の *Averno* や飛行機が激突したあとのツインタワーから飛び降りる人たちを題材に書かれた詩を扱う。そこにはこの悲劇を記録しようとする衝動と、悲劇を芸術作品として昇華することへの倫理的な躊躇いと葛藤がある。この葛藤の間で、タブーが生まれ、そのタブー化されたものが、知覚を拒む「話してはいけないこと」になってい

き、9.11に関する詩が、その悲劇を言語化しようとすると同時に、それを消し去っていく状況を分析する。結論では、現代においては、メランコリー的な「明確な喪失」ですらもその実感が失われることによって、ディスチミア的な不明瞭な「喪失の喪失」に変化していくこともあるという観察と、この「失われた喪失」という概念がエレジー研究以外にも応用できる可能性を示唆する。

2. 研究の目的

この研究では、現代アメリカ詩におけるエレジーの変化について考察する。現代以前のエレジーでは「慰め」(consolation)が重要な思想基盤であったが、現代詩は「慰め」が否定または複雑化された現状と向き合う。従来の学説はこの事象を現代的懐疑主義などで説明することが多かったが、本研究では「失うことを失った」という無意識的喪失感(lost loss)によるものではないか、と提案する。この研究の目的は、文学的意義としては現代におけるエレジーの変化を解明することであり、社会的要請としてはアメリカにおける9.11、日本における3.11、個人においては親しい人の死など、常に必要とされる追悼のより助けになる形を模索することである。「喪失の喪失」を知覚し理解することは、それ自体慰めにならなくとも、悲痛の緩和の可能性を探る手助けになる。

3. 研究の方法

現代詩において「喪失の喪失」が哀悼を複雑化しているという仮説の実証として、Wallace Stevens の“The Owl in the Sarcophagus,” Sylvia Plath の1962-1963に書かれた詩群, Elizabeth Bishop のGeography III, Louise Glück のAvernoなどの作品を一次文献、二次文献、アーカイブ調査による資料裏付け、及び文化理論(精神分析、心理学)を用いて読解する。

4. 研究成果

本研究課題における研究成果の主たるものは、以下のとおりである。

(1) *Lost Loss in American Elegiac Poetry: Tracing Inaccessible Grief from Stevens to 9/11*

本著は、本研究課題における主要研究成果である。その背景、目的、手法は、本研究課題全体のものとはほぼ同一であるが、研究を進めるにつれて構想が深化していった箇所もある。本著の主目的は、現代アメリカ詩を中心にWallace Stevensから9.11後のエレジーまでの作品群を、歴史、哲学理論、精神分析、社会心理などの多角的視点から考察することで、「失われた喪失」(lost loss)という認知されづらい喪失の概念を提示し分析することである。本研究の文学的意義は、喪失対象が不明瞭になり認識することが困難な喪失感を表象する現代エレジーの変化を解析することであり、社会的意義は、曖昧な喪失(ambiguous loss)や剥奪された悲痛(disenfranchised grief)などの複雑化している喪失概念について考察することで、より慰めとなりうる哀悼の形を模索することにある。

序章では、John Milton, Thomas Gray, William Wordsworth, Emily Dickinson, William Cullen Bryant, Malka Heifetz-Tussman, Theodore Roethkeなどの作品を俯瞰しながらエレジーの歴史的变化をたどり、「失われた喪失」(lost loss)や、ディスチミア的追悼(dysthymic mourning)等の基盤的概念を紹介する。第一章は、Wallace Stevensの、“The Owl in the Sarcophagus”を含む後期作品をもとに、「失われた喪失」という現象と現代アメリカ詩の関連を可視化し、本著の基盤概念を確立する。第二章は、Sylvia Plathが1962-1963に書いた詩群を解析し、「失われた喪失」という喪失の不明瞭化が、メランコリアよりディスチミアによって象徴されると提言する。第三章は、Elizabeth BishopのGeography IIIの詩を中心に、不明瞭な喪失に形をあたえ、それを知覚しようとする試みに焦点をあてる。第四章は、Sharon OldsのThe Dead and the Livingの詩をもとに、時代的もしくは地理的に「遠い」人々の死や苦しみつまり、人によっては自分が感じる「喪失」とは認識しない事象に対する共感の可能性について論考する。第五章は、9.11以降のエレジーの代表例としてLouise GlückのAvernoや、ツインタワーから飛び降りた人々を描いた詩を扱う。そこには悲劇を記録しようとする衝動と、悲劇を芸術作品として昇華することへの倫理的な躊躇いと葛藤がある。この葛藤の間で、タブーが生まれ、その対象が、知覚を拒む「語ってはいけないこと」になっていき、9.11に関する詩が、その悲劇を言語化しようすると同時に、それを消し去っていく状況を分析する。最終章は、現代においては、「明確な喪失」

失」ですらもその実感が失われることによって、不明瞭な「失われた喪失」に変化していくこともあるという観察と、この「失われた喪失」という概念がエレジー研究以外にも応用できる可能性について、論じる。

本著は、アメリカ・メリーランド州を拠点とする 1949 年創立の出版社 Rowman & Littlefield の学術部門、Lexington Books から出版された、査読付学術著書である。トラウマ研究で知られる Central Connecticut State University 所属の Aimee Pozorski 教授と University of Hartford 所属の Nicholas Ealy 教授によって編集される Reading Trauma and Memory シリーズ (https://rowman.com/Action/SERIES/_/LEXRTM/Reading-Trauma-and-Memory) から刊行されており、審査プロセスとして、シリーズ編集者による審査、非開示の専門家による査読、アドバイザリーボードの承認などを経て、出版される。本著は、計 246 ページの学術図書で、現在、ハードカバー、ペーパーバック、及び電子書籍として、発行されている。また、2021 年に、アメリカ文学会賞を受賞している。

(2) “Theorizing Elegiac Consolation as a Transitional Object: The Arab Dream in William Wordsworth’s *The Prelude*”

本研究の派生課題として執筆された学術論文である。主要学術出版社ルートレッジ発行で、北米ロマンティシズム研究学会 (The North American Society for the Study of Romanticism) に連なる 1990 年創刊の学術誌 *European Romantic Review* に掲載された。ロマン派詩人 William Wordsworth の代表作 *The Prelude* で表現される「慰め」の概念を、D. W. Winnicott らの精神分析理論を用いて、理論化する。この論文は、double-blind peer review を経て掲載に至っている。

(3) “The Problematics of Self-Elegy: John Berryman’s ‘Dream Song 78, Op. posth. no.1’”

本研究の派生課題として執筆された学術論文である。主要学術出版社ルートレッジ発行の、1942 年創刊の学術誌、*The Explicator* に掲載された。20 世紀アメリカ告白派詩人 John Berryman の代表作 *The Dream Songs* に収録されている “Dream Song 78, Op. posth. no.1” を、自分の死に際し捧げる哀歌 (self-elegy) というジャンルをメタ分析する作品として、Roland Barthes や Paul de Man らの文学理論を用いて読み解く。この論文は、double-blind peer review を経て掲載に至っている。

(4) “Photographs of the Dead: Posthumous Identity Assertion and the Possibility of Empathy in Sharon Olds’s *The Dead and the Living*”

現代アメリカ詩人 Sharon Olds の代表作 “Photograph of the Girl” を含む詩集 *The Dead and the Living* を、Susan Sontag、Walter Benjamin、Roland Barthes らの写真理論を援用しながら、被写体の死後にもそのアイデンティティを主張し続ける写真の中の人物に対し沸き起こる人道的共感というテーマから読み解く。本研究の主成果の著書、*Lost Loss in American Elegiac Poetry* の第四章にあたる箇所の試作品として執筆され、『女性学評論』に掲載された。

(5) その他国内・国際学会発表 (10 件余)

本課題研究期間中に、上記、学術著書 1 編、学術論文 3 編のほか、派生課題を含む 10 件余の国内・国際学会発表が行われた。発表が行われた学会のうち主要なものには、アメリカ文学会、Modern Language Association、Pacific Ancient and Modern Language Association、Northeast Modern Language Association などが含まれる。発表タイトルは、下記のものを含む：

- Images of Crisis: Poetic Ways of Seeing Disasters
- 認知共有されない危機の表象 2016 年大統領選挙後のアメリカ現代詩
- Performing Empathy: When Literary Texts Are Acts of Kindness
- Literature and Healing
- Poetics of Dark Humor: Reassessing the Trope of Vulnerability in Post-1945 American Poetry
- Post-9/11 Elegiac Poetry: From Poetic First-Responders to the Ethicists of Prolonged Mourning

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Toshiaki Komura	4. 巻 36
2. 論文標題 Translation and Ethical Empathy: Robert Lowell's Imitations	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 188-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Toshiaki Komura	4. 巻 33
2. 論文標題 The Otherworld in Everyday Life: the Fantastical Realism of Contemporary American Poetry	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Women's Studies Forum	6. 最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Toshiaki Komura	4. 巻 30
2. 論文標題 Theorizing Elegiac Consolation as a Transitional Object: the Arab Dream in William Wordsworth's The Prelude	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Romantic Review	6. 最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10509585.2019.1570182	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Toshiaki Komura	4. 巻 77
2. 論文標題 The Problematics of Self-Elegy: John Berryman's "Dream Song 78, Op. posth. no.1	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Explicator	6. 最初と最後の頁 17-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00144940.2018.1551773	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Post-9/11 Elegiac Poetry: from Poetic First-Responders to the Ethicists of Prolonged Mourning
3. 学会等名 Northeast Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Learning with Cats: What Cats Do and Don't Teach Us about Dying and Grieving
3. 学会等名 Northeast Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Poetics of Dark Humor: Reassessing the Trope of Vulnerability in Post-1945 American Poetry
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Beyond the Assimilation-foreignization Paradigm: The Trajectory of Japanese-American Poetry
3. 学会等名 Northeast Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Inclusive Contradiction: the Double Reflections from Japanese-American Internment Poetry
3. 学会等名 Northeast Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Performing Empathy: When Literary Texts Are Acts of Kindness
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Translator as Actor: Ethics of Poetic Translation in Robert Lowell's Imitations
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Images of Crisis: Poetic Ways of Seeing Disasters
3. 学会等名 Pacific and Ancient Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Sights of Resilience: Post-3/11 Japanese Poetry and Ethical Empathy
3. 学会等名 Pacific and Ancient Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古村敏明
2. 発表標題 認知共有されない危機の表象：2016年大統領選挙後のアメリカ現代詩
3. 学会等名 アメリカ文学会関西支部第61回大会フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Literature and Healing
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshiaki Komura
2. 発表標題 Imagination of Peace: Pacifism beyond the Anti-War in Modern American Poetry
3. 学会等名 Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Toshiaki Komura	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Lexington Books, Rowman and Littlefield	5. 総ページ数 246
3. 書名 Lost Loss in American Elegiac Poetry: Tracing Inaccessible Grief from Stevens to Post-9/11	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------